▽ 目次 ▽

花とパフェ　5
彼岸につなぐ　13
半年後にまた、デートをしよう　25
昨日の雨予報、明日の晴れ予言　43
半年毎が約束だった　49
永らえるのが夢だった　77
あめを降らせる　87
夢で逢いましょう　93
半年越しの約束を　99
休日は君に会いにいく　121

花　と　パ　フ　ェ

花をたくさんもらってきた。
両手いっぱい、一抱えもするほどの大きな花束。
秘書就任おめでとう、と仕事仲間はみんな笑っていたけれども、その少し前、閻魔庁近くに突如大量に咲き乱れた花に良く似ている気がした。
淡い色合いの、薄い花弁のふわふわした花。
色とりどりで、鮮やかで、まったく僕には似合わないような。
前触れなくある日突然、乾いてひび割れて荒れ放題の地面を一面埋め尽くした花。

そもそも、僕が秘書になったのなんて、もうわりと前のことだった。
どう考えても悪ふざけとしか思えなくって、実際聞いてみればみんないっそう笑みを深くして、おめでとうなんて手を叩くのだ。
どう考えても面白がっている。
だけど僕だって面白がっている。
別段、悪い気はしないのだった。祝われているのは本当だし、おめでとう、もきっと本当だ。
こんな大きなの、誰が運ぶと思ってんだ、なんて笑いながら小突く真似をしてみたり、どこに飾れって言うんだよ、なんて笑うのもそう悪くない。
そうやって久しぶりにみんなとひとしきり騒いでから、戻ってきたのは死者を裁くための部屋だった。
今の、僕の仕事部屋だった。
自分の部屋はあまり広くない。こんなにたくさんの花を生ける花瓶も無ければ、代用できるようなつぼも無い。
第一飾ったらあまりにも手狭になってしまうだろう。
だから仕事部屋の、普段は使わないものを手当たり次第突っ込んだような、埃っぽい棚の中を掻き分けた。何に使うのかわからないようなものばかり詰まってい

るから、何かひとつくらいは役に立つだろう。
どうにか、手ごろに細長い器を見つけたところだった。
「あれ、かくれんぼ？　おしり隠れてないよ」
「ぶっ！」
触られた。そりゃあもう痴漢もびっくりってくらい、あからさまに、遠慮なく。
まるで猫かなんか撫でるみたいに。
とっさに体を起こそうとして、頭を強か打ち付けた。痛い。そりゃあもう、めちゃくちゃ痛い。涙出た。
とっさに息を鋭く吸ってしまって、咳込んだ。喉の奥まで刺すように痛い。埃が目に染みてますます涙ぐむのが自分でわかる。散々だ。棚の奥の方まで探すために、半分くらい体を突っ込んでいたのだから当然だ。上なんてない。仕切りの天板があるだけで頭を上げられる余裕なんかない。
目の前で比喩でも何でもなく星が散ったのを見た。
しばし悶絶。下手に動くことさえできず頭をかばうこともできずただひたすら耐える。痛みが引いていくのをひたすらに待つ。
注意深く後退して、ようやくまともに息をつけたのだった。体中埃っぽい気がして嫌だった。振り払うように全身ばたばた叩いてやると、悲鳴が上がる。すぐ近くでくしゃみの音。
「何してくれてんだ！」
小突く、真似なんかでは済まされない。
親指を握り込む形の拳を叩きつけると、いかにも哀れっぽい悲鳴が上がって案の定、予想通りの人影が足元に崩れ落ちていた。
「ひどい。ディーブイだ！」
「お前とそんな親しくなった覚えはねえよ！」
ぜえぜえと。
息を切らしてまで動揺した自分を自覚して、頭を抱えてうずくまった。ああもうまだ触ると痛い。じんじ

んする。熱っぽい気がする。
あんまりだ。
僕に殴られてひどいひどいなんて連呼して、床で転がり続けているのが他の誰でもない、閻魔大王だ、という事実も僕を打ちのめす。
「お願いですから、頼みますからもうちょっと威厳というものを持ってくださいお願いします」
「あ、なんかそう丁寧に来られる方が胸にずしっとくるね？」
「誰のせいだ」
「オレじゃない」
「お前だろ！」
拳を握りしめる。親指を中に入れて。
「だからそれ痛いんだってば！」
きゃんきゃんと喚くのを見ては気力を失い、どうしてこれが僕の上司なのだろうと思うばかりだった。
「あ、それオレだ」
「お前のせいじゃねえか！」
花の異常繁殖の話だ。
「だって！　こう、急に花畑をあははうふふしながら戯れたくなったんだよ！」
「ひとりでか！」
「素敵な恋が、したいよね」
「こっちみんなまじ見んなその流し目やめろやめてください」
「デートに誘うにしてもまずシチュエーション作りからかなーって」
「お前デートコースのプラン練りに練りまくって少しでも逸脱する行動相手にとられるとすぐ破綻するタイプだな」
「遅刻して先に帰られちゃうタイプかな……」
「なお悪いわ！」
なんだろう、どんどん頭が悪くなっていく気がする。

ていうか何話してんだかわかんない。何で話してるんだかわからない。

要はただの言葉遊びの雑談なのだ。意味なんてないし必要だってない。

ただ思いつくままポンポンと、言葉を投げつけるのはある種の痛快さを持っている。

上司相手にこんな、無遠慮なドッジボールみたいなことしていいのか、と思うこともあるけど。

「いんじゃない？　素敵素敵。花瓶じゃないけど」

「何なんでしょうねこれ」

「……こう、あれですね、ある日突然オレは思ったわけだ。腹を壊すほどのチョコレートパフェが食べてみたい！」

「……！　ま、まさか」

「そう、そしてオレはこうして、まずは盛り付けるための器を用意して」

「ガラスで」

「これでも修行したんだよ師匠のところに頼み込んで弟子入りするところから」

「変なところ凝り性だな……ていうかわかったアンタ暇なんだろ……」

「時間は捨てるほどあるからねえ」

「結局パフェは食べれたのか」

「良いアイス職人を探す前に飽きた」

「買えばいいじゃないか……バカだ……こいつ、生粋のバカだ……！」

「まあいいじゃないか鬼男君。うん、きれいきれい。収まるところに収まったってかんじ」

そう言って、大王は一抱えもある元パフェ容器現花瓶を机に乗せて、満足そうに頷いてから振り向いた。

「ところで明日はどうするの？　ま、一日二日くらい水替えなくっても平気だとは思うけど」

「……ん？」
「……あれ？」
「明日？」
「休み、だよね？」
「あれ……」
ゆっくりと。
壁に貼っといたカレンダーを見て、ぐるぐると赤丸がついている数字を見つけた。
明日の日付。
七月の。
「……忘れてた？」
「……」
そう言えば、花を押し付けられた時。
今日、飲んでくか？　なんて。
誘われたような気がしてくる。
そしていやあ仕事があるから今日は遠慮するよ、なんて優等生ぶった答えをしてしまったような気がする。

あの時の怪訝そうな顔はつまりそう言うことで。
「しねえよ……しないよ、仕事なんて！」
「お、いいぞ鬼男君。そうだそうだ、仕事なんてしないほうが良いんだ！」
「お前はしとけ！」
「やなこった！」
けたけたと大王は笑っている。
笑いながらこんなことも言ってくる。
「どうせ忘れてたんだろう鬼男君。だから特に用事だってないんだろう鬼男君？　しょうがないなあ。じゃあ今、特別に、一個予定を立ててあげよう」
「なんですかもう嫌な予感しかしないけど一応聞いてあげます」
「なんだよもう、親切で言ってあげてるのにその態度。……まあいいや」
じゃーん、なんて擬音付きで、どこから取り出したのか。

大王が広げて掲げてみせたのは、下界の観光案内の雑誌だった。
「パフェ、食べに行きましょう！」
いえーい、なんてもう大王はきっとその気だ。僕が断るなんて欠片も思っちゃいない。
その能天気さが腹立たしくもあり。
なぜだろう。
仕方ないな、なんて言葉といっしょに、楽しみになってきている僕がいる。
「仕方ないですね」
やっぱり、口から出るのは同じ言葉だったけど、大王はとにかく楽しそうだ。
浮かれているような大王を見ていれば、まあ、これは、これで。
いいんじゃないかな、なんて。

収まるところに収まったね。
成り行き任せでも、まあ、悪くはないと思うのだ。